

〈新刊紹介〉

松本光隆著

『平安鎌倉時代漢文訓読語解析論』

本書は、『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』の姉妹編として、著者のこれまでの論文を一書にまとめたものである。平安鎌倉時代の多様な実状と多重性を認めた上での漢文訓読語史の構築をめざし、従来の「証本」的規範的訓読による訓読語史への発想の転換を論じた書である。

本書の構成は次のとおりである。「緒言／凡例」に続き、「第一章 ことばの変化と人間」には「序節 ことばの変化と人間」,「第一節 天台宗寺門派西墓点資料における平安時代中期・後期の声点」,「第二節 院政期の天台宗寺門派西墓点資料における「△」声点の発祥と伝流」,「第三節 声点に見る平安時代天台宗寺門派の教学的アイデンティティー」を含む。「第二章 ことばの多重構造」には「序節 類聚集成資料の解析方法」,「第一節 仁和寺蔵医心方における訓読語の組成」,「第二節 高山寺蔵伝受類集鈔の訓読語基調と史料的評価」,「第三節 高山寺蔵儀軌資料における書入注の諸相」,「第四節 儀軌の訓読語と加点」を含む。「第三章 ことばの資料の実存の意味」には「序節 伝存資料と非伝存資料の訓読語」,「第一節 半井本医心方天養二年点における初下点の訓読語と重加点の訓読語」,「第二節 「証本」の訓読語史と「狼藉本」の訓読語史」,「第三節 漢籍訓点資料における訓読語の位相と文体」を含む。「第四章 ことばの実存の諸相」には「序節 漢文訓読語史の文体解析」,「第一節 上表と勅答の訓読語」,「第二節 源氏物語絵巻・元永本古今和歌集における敬語表現法について」,「第三節 知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓平安初期点における待遇表現体系」,「第四節 石山寺蔵仏説太子須陀拏経平安中期点における訓読語の文体」を含む。「第五章 ことばの解析試論」には「序節 漢文訓読語史の方法」,「第一節 平安後半期・鎌倉時代における漢文訓読語解析試論」,「第二節 高山寺蔵金剛頂瑜伽経寛治二年点の訓読法」,「第三節 中院僧正明算の訓読語」,「第四節 訓点資料における訓読語複層性の一様相」,「第五節 漢文訓読語史研究における同文比較法の陥穽」,「第六節 鎌倉時代漢籍訓読における訓読法の多重性」を含む。「第六章 ことばの歴史的研究の課題」には「序節 漢文訓読語史研究の課題」,「第一節 平安初期における密教経典の訓読語」,「第二節 角筆書入の認知・認識と年代推定」,「第三節 喜多院御室守覚法親王の口頭語資料」,「第四節 日本語史解析資料としての漢文訓読語史料」を含む。末尾に、「補注」,「各章各節初出一覧」,「あとがき」,「索引」を付す。

(2017年8月10日発行 汲古書院刊 A5判横組み 770頁 20,000円+税 ISBN 978-4-7629-3635-7)

井上史雄編

『敬語は変わる——大規模調査からわかる百年の動き——』

本書は、国立国語研究所で1953年から開始された愛知県岡崎市における大規模調査結果の調査報告をまとめたものであると同時に、敬語の指南書・概説書としての側面ももつ書である。調査報告は魅力的なタイトルと平易な文章でまとめられ、概説部分は歴史的・地理的視点から一般読者にもわかりやすく論じられている。また、写真も取り入れた敬語景観などのコラムページもあり、敬語の実態が多角的に捉えられる書といえる。

「前書き」に続き、「第1章 現代敬語の位置——乱れではなく変化——」には「1-1 敬語は発展途上」, 「1-2 敬語はどう調査されてきたか」, 「1-3 『敬語の指針』に見る現代敬語の性格変化」。「第2章 岡崎敬語調査の理論的成果——岡崎で何がわかったか——」には「2-1 年をとると話が長くなる」, 「2-2 年をとると話が丁寧になる」, 「2-3 「ていただく」の進出と敬語の変質」, 「2-4 平等な社会における平等な敬語の進出」, 「2-5 配慮表現と談話機能要素の増加」, 「2-6 第三者敬語の衰退」, 「2-7 ライフステージと敬語の成人後採用」。「第3章 岡崎敬語の位置づけと発展——理論と研究対象の拡大——」には、「3-1 敬語変化と方言の対応関係」, 「3-2 岡崎地方の伝統的敬語の地理・歴史」, 「3-3 卑罵語と敬語の発達」, 「3-4 マイナス待遇表現の衰退」。「第4章 岡崎敬語の研究法」には「4-1 岡崎敬語調査から学ぶ実時間調査の方法論的落とし穴」, 「4-2 敬語の調査はどのように分析するか」。末尾に「後書き」, 「参考文献」, 「索引」を付す。

(2017年9月1日発行 大修館書店刊 四六判縦組み 296頁 2,300円+税 ISBN 978-4-469-22260-9)

沖森卓也編著、木村一・木村義之・陳力衛・山本真吾著

『図説 近代日本の辞書』

本書は、近代日本の辞書についてまとめた概説書である。近代日本の辞書を大きく8つに分けて概説を付し、それぞれの主要な辞書の解説と図版を掲出しながらまとめられている。

本書の構成は次のとおりである。「はじめに——近代日本の辞書序説——(沖森卓也)」, 「第1章 節用集(木村義之)」, 「第2章 唐話辞書とその周辺(陳力衛)」, 「第3章 蘭和和蘭辞書(陳力衛)」, 「第4章 英華華英字典(陳力衛)」, 「第5章 英和和英辞書とその周辺(木村一)」, 「第6章 漢語辞書・漢和辞書(山本真吾)」, 「第7章 国語辞書(沖森卓也)」, 「第8章 特殊辞書・専門語辞書(木村義之・陳力衛)」。

末尾に「参考文献」, 「書名索引」, 「人名索引」, 「事項索引」を付す。

(2017年9月20日発行 おうふう刊 A5判横組み 160頁 1,800円+税 ISBN 978-4-273-03808-3)

西山佑司・杉岡洋子編

『ことばの科学——東京言語研究所開設 50 周年記念セミナー——』

本書は、東京言語研究所が 2016 年度に開設 50 周年を迎えるにあたり開催された記念セミナーにおける内容をまとめた書である。本書第 I 部は記念セミナー初日に行われた公開シンポジウム「日本語はどのような言語か——内から見た日本語、外から見た日本語——」の内容が基礎となっている。また、第 II 部は記念セミナー 2 日目に行われたリレー講演「ことばの科学——将来への課題——」の内容をもとにまとめられている。

「第 I 部 日本語はどういう言語か——内から見た日本語、外から見た日本語——」には「第 1 章 複合語の小宇宙から日本語文法の大世界を探る (影山太郎)」、 「第 2 章 「話し手」考慮の重要性と日本語——「～ている」と「～である」表現を中心に—— (高見健一)」。 「第 II 部 ことばの科学——将来への課題——」には、「第 3 章 音韻論の課題——類型論的観点から見た日本語の音韻構造—— (窪菌晴夫)」、 「第 4 章 日本語学の課題——「記述」と「理論」の壁を越えて—— (三宅知宏)」、 「第 5 章 社会言語学の課題——ことばの選択を考える—— (嶋田珠巳)」、 「第 6 章 生成文法の課題——人間の言語機能の解明に向けて—— (高橋将一)」、 「第 7 章 認知言語学の課題——文化解釈の沃野—— (大堀壽夫)」。末尾に「索引」を付す。

(2017 年 9 月 23 日発行 開拓社刊 四六判横組み 192 頁 2,000 円+税 ISBN 978-4-7589-2248-7)

全美炷著

『東京語におけるアクセント句の形成
——実験及びコーパスによる dephrasing の分析——』

本書では、話し手の意図した発話の構造を伝達するための音声特徴であるイントネーション形成の要因に迫り、東京語において修飾関係や発話速度などが dephrasing の生起環境に及ぼす影響を統計的に分析する。

本書の構成は次のとおりである。「第 1 章 序論」、「第 2 章 研究方法」、「第 3 章 2 文節の合計モーラ数及び発話速度」、「第 4 章 修飾関係及び統語機能」、「第 5 章 アクセント型の組み合わせ」、「第 6 章 フォーカス」、「第 7 章 統語境界及び 2 文節の位置」、「第 8 章 レジスター及び話者の社会的属性」、「第 9 章 統計モデルの構築」、「第 10 章 結論」。末尾に、「引用文献」、「付録」、「謝辞」、「索引」を付す。

本書は、筆者が 2015 年 7 月に一橋大学大学院言語社会研究科に提出した博士学位論文をもとにしたものであり、刊行にあたり韓国外国語大学日本研究所より出版助成を受けている。

(2017 年 10 月 22 日発行 くろしお出版刊 A5 判横組み 246 頁 3,700 円+税 ISBN 978-4-874247396)

李在鎬編

『文章を科学する』

本書は、個々人の主観性の裏側に働く普遍的属性を科学的方法で捉えることを目指した文章の研究書である。編著者である李氏が2015年から取り組んできた本書タイトルの連続ワークショップが刊行の出発点となる。文章を科学的に捉えるためのアプローチとして、理論編、技術編、研究編の3つの柱を立て全10章で構成される。

まず第1部理論編には「1 文章の科学が目指すもの(李在鎬)」、「2 文章とは何か——日本語の表現面から見たよい文章——(石黒圭)」、「3 作文と評価——日本語教育的視点から見たよい文章——(伊集院郁子)」。第2部技術編には「4 文章の計量的分析(李在鎬)」、「5 文章の計量的分析ツール「KH Coder」——言語学的な分析のための設定と操作——(樋口耕一)」、「6 自然言語処理における文章解析(河原大輔)」、「7 文章解析を目的とするウェブ基盤システム(長谷部陽一郎・久保圭・李在鎬)」。第3部研究編には「8 学習者作文を科学する(李在鎬)」、「9 英語の自動作文評価(小林雄一郎)」、「10 文章の難易度を科学する(長谷部陽一郎・李在鎬)」。末尾に、「索引」、「執筆者紹介」を付す。

(2017年10月23日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 208頁 2,600円+税 ISBN 978-4-89476-881-9)

沖森卓也・笹原宏之編著

『日本語ライブラリー 漢字』

本書は、日本語の文字表記としての漢字を本格的に学ぶための概説書である。漢字の成り立ちからその構成原理および歴史的発展について述べ、漢字のもつ形音義(字形・字音・字義)の観点から中国・日本の発展の経緯をまとめている。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 成り立ちからみた漢字(沖森卓也・鳩野恵介・笹原宏之)」、「第2章 形からみた漢字(鳩野恵介)」、「第3章 音からみた漢字(吉川雅之・尾山慎・鳩野恵介)」、「第4章 義からみた漢字(マシュー ジスク)」、「第5章 表記からみた漢字(尾山慎・笹原宏之)」、「第6章 社会からみた漢字(尾山慎)」、「第7章 アジアのなかの漢字(吉川雅之・吉本一・清水政明)」。末尾に「参考文献」、「索引」を付す。

(2017年10月25日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 190頁 2,900円+税 ISBN 978-4-254-51617-3)

沖森卓也・肥爪周二編著

『日本語ライブラリー 漢語』

本書は、漢語に焦点を当てた書である。本シリーズには漢語も含め借用語一般を扱う『日本語ライブラリー ことばの借用』があるが、漢語に特化した本書が新たに刊行された。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 語種・出自からみた漢語（沖森卓也・櫻井豪人）」、「第2章 音形・語形からみた漢語（石山裕慈）」、「第3章 語構成からみた漢語（肥爪周二）」、「第4章 文法形態からみた漢語（須永哲矢）」、「第5章 意味からみた漢語（石山裕慈・孫建軍・成玳珂）」。末尾に「参考文献」、「索引」を付す。

(2017年10月25日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 166頁 2,700円+税 ISBN 978-4-254-51616-6)

松浦恵津子著

『日本語教育における文法指導の現場から
——照応・接続・文の成分間の関係性の諸相——』

本書は、文の要素間の関係について明らかにすることをめざし、文中のある要素がその形式に応じて他要素とのあいだに作る関係を取り上げ、その理解に基づく予測能力とその関係を論じた書である。著者が、留学生への日本語指導において文の意味の理解には文の要素間の関係性の把握が大きくかかわっていることに気づき、そうしたテーマに取り組んだものである。日本語学習者が誤る例外的な用法について文中の要素や形式の間で機能している関係を手がかりに帰納的に解明する。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 ニュース文聴解における予測能力——テ形接続を中心とした日本語母語話者と日本語学習者との比較——」、「第2章 指示語「ソナナ」と「ソウイウ」について」、「第3章 指示形容詞と名詞とのかかわり」、「第4章 書き言葉における文脈指示——「この」と「その」の場面と場——」、「第5章 会話文における文脈指示のコ・ソ・ア」、「第6章 接続詞「それが」の意味・用法について」、「第7章 逆条件節をつくる形式——テモ・～トシテモ・ニシテモ・ニセヨ [ニシロ] ——」、「第8章 「～ないまでも」節の意味と機能」、「第9章 逆接的な関係をつくる「Nデモ」——Nデモ（名詞+とりたて助辞）とNデモ（名詞譲歩形）——」、「第10章 「過不足・優劣」を表す動詞連体形について——「上回る」を中心に——」。

末尾に「初出等一覧」、「参考文献」、「用例出典」、「おわりに」、「英文要旨」、「索引」を付す。

(2017年10月31日発行 笠間書院刊 A5判横組み 240頁 3,200円+税 ISBN 978-4-305-70852-6)

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳著

『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』

本書は、音声研究において世界的に活用されている音声分析・実験プラットフォームソフトウェア「Praat」についての解説書であり、また音声学の入門書でもある。Praatの使用法を、音声学・発音・聴解のなかで扱われるトピックを通して学ぶ実践的なテキストとして対応できる構成となっている。

まず、「まえがき」に続き「I 入門編」には「00 Praatのインストール」、「01 はじ

めに]。「Ⅱ 初級編」には「02 音声分析の初歩——サウンドエディターを使う——」, 「03 音声の編集——かんたんな加工・抽出・調整——」, 「04 テキストグリッドの利用——音声に情報を書き込む——」, 「05 スクリプトの作成 (1) ——ヒストリー機能を用いた作業の省力化——」。「Ⅲ 中級編」には「06 より精密な音声分析——オブジェクトとクエリーを使う——」, 「07 音声の可視化——ピクチャーウィンドウを使う——」, 「08 初歩的な音声の合成と再合成——ManipulationEditorを使う——」, 「09 音声知覚実験 (1) ——実験構築の基礎——」, 「10 スクリプトの作成 (2) ——プログラムの記述——」。「Ⅳ 上級編」には「11 音声分析のカスタマイズ——セッティングの変更——」, 「12 より体系的な音声の再合成——音声の特徴を数値で指定——」, 「13 音声知覚実験 (2) ——より複雑な音声実験構築——」, 「14 スクリプトの作成 (3) ——情報をテキストグリッドから取り出す——」。「Ⅴ 付録」。末尾に「著者紹介」を付す。

(2017年11月7日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 218頁 2,400円+税 ISBN 978-4-89476-871-0)

天野みどり・早瀬尚子編

『構文の意味と拡がり』

本書は、2012年10月6日に開催されたワークショップ「構文の意味をめぐって——日本語研究と構文理論の接点を中心に——」, 2013年10月12日に開催されたワークショップ「構文と意味の拡がり」, 2016年10月8日に開催された同名の研究集会の成果がまとめられたものであり、研究集会における研究発表を論文化したものである。

「第1部 構文研究の流れ」には「第1章 総論——構文論の最近の展開と今後の展望—— (早瀬尚子)」, 「第2章 総論——日本語研究分野における構文研究—— (天野みどり)」。「第2部 記号論の視点からの拡がり」には「第3章 逸脱表現とアプダクション——日本語と俳句とハイクとコンクリート・ポエトリー—— (有馬道子)」。「第3部 構文の成立と拡がり」には「第4章 分詞表現の談話標識化とその条件——懸垂分詞からの構文化例—— (早瀬尚子)」, 「第5章 日本語の発見構文 (三宅知宏)」, 「第6章 日本語恩恵構文の意味の拡がり」と構文の関係性 (益岡隆志)」, 「第7章 受益構文の意味拡張——《恩恵》から《行為要求》へ—— (天野みどり)」, 「第8章 構文推意の成立と拡張——日本語の助動詞構文を主な例にして—— (加藤重広)」。「第4部 規範からの逸脱と拡がり」には「第9章 逸脱的構文から見る中核的現象と周辺的現象との相関 (大澤舞)」, 「第10章 イ落ち構文における主語の有無 (今野弘章)」, 「第11章 構文としての日本語連体修飾構造——縮約節構造を中心に—— (本多啓)」, 「第12章 アメリカ英語における破格構文——一節の周辺部に注目して—— (柴崎礼士郎)」, 「第13章 フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文文化 (渡邊淳也)」。末尾に「執筆者紹介」を付す。

(2017年11月15日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 254頁 3,700円+税 ISBN 978-4-87424-744-0)

ティモシー J バンス・金子恵美子・渡邊靖史編
『連濁の研究——国立国語研究所プロジェクト論文選集——』

本書は、国立国語研究所の研究助成を受けた共同研究プロジェクト「日本語レキシコン——連濁辞典の編纂——」の成果をまとめたものである。歴史、心理学的分析、方言、言語習得など各分野の視点から連濁を捉える研究書である。

本書の内容は次のとおりである。「第1章 序説（ティモシー J バンス・金子恵美子・渡邊靖史）」、「第2章 連濁研究史——ライマンの法則を中心に——（鈴木豊）」、「第3章 個別音素と連濁（浅井淳・ティモシー J バンス）」、「第4章 連濁とアクセント——普通名詞と無意味語の場合——（太田聡・玉岡賀津雄）」、「第5章 生成音韻論における連濁の理論的分析（川原繁人・三間英樹）」、「第6章 連濁の心理言語学的研究（川原繁人・竹村亜紀子）」、「第7章 姓に見られる杉藤の法則と拡張版ライマンの法則に関する形態的・音韻論的考察（三間英樹・浅井淳）」、「第8章 日本語母語児の連濁処理方略（杉本貴代）」、「第9章 日本語学習者による連濁意識と獲得（中澤信幸）」、「第10章 東北山形方言の連濁（宮下瑞生）」。末尾に「索引」、「執筆者紹介」を付す。

(2017年11月25日発行 開拓社刊 A5判横組み 256頁 3,200円+税 ISBN 978-4-7589-2252-4)